本講座は大学入学共通テストで90％の得点を目標としています。

大学入学共通テストの現代文といえば

「図やグラフが出るんでしょ」
「実用的な文章が出るんでしょ」
「今までの現代文と全然違うんでしょ」

と思っている人もいると思います。しかし、大学入学共通テストも「現代文」であることは間違いありません。ですから、その対策も何か特別な知識が必要だということもありません。今までの現代文学習の延長線上に「大学入学共通テスト」はあります。

「大学入学共通テストの現代文は変わっている」
という常識を覆すのがこの講座です。

本講座を終えたとき
「なんだ、大学入学共通テストなんて二次試験や難関私大の問題に比べたら簡単だ」
と思えるように講義をしていきます。

この講座で、みなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講座の現代文の考え方

本講座は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の３つです。

①　文法

②　構文

③　論理

たとえば、**①文法**ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、**②構文**ですが、本講座では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係からなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、③**論理**ですが、ここが本講座の最大の特徴です。①**文法**や②**構文**は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③**論理**は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといって良いでしょう。数式が世界共通の言語であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講座では論理を以下の**「４つの言葉のルール」**と**「その使い方」**と定義します。

- **「でない」という否定**
- **「かつ」という連言**
- **「または」という選言**
- **「ならば」という条件法**

以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書いています。ですから、読者もそのルールを理解して読まなければなりません。本講座ではその「ルール」と「使い方」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講座の開講です。

柳生　好之

受講の際の注意点　効果的な講座の利用法

最高の講座を用意しましたが、ただ映像を見るだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習・復習について

この講座を受ける前に、予習として自分の力で問題を解答してみてください。はじめは時間制限なしでも構いません。共通テストの問題は解く手順が重要です。講座の中で効果的な読み方・解き方を説明していますので、自分の解き方と比較しましょう。講座を受けた後には、復習として学んだ読み方・解き方を実践しながら、もう一度問題に取り組みましょう。

重要　**講座の中で説明される解き方・読み方を実践する。**

よく「現代文は復習しなくても良い」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくて良い」なら復習して覚えるべきポイントがない「講座」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講座は復習してほしいポイントを用意しています。

ポイントをしっかり覚えてください。現代文を分析する上で必要になる考え方です。

重要　復習のポイントを押さえる。

Ⅱ　講座について

本講座は「本文を図にまとめたパート」と「本文テキストへの書き込みを説明するパート」の構成が基本となっています。本文を図にまとめている部分は本文の下のメモ欄に書き込みましょう。もう一方のテキストの画面では、本文に「線引き」をしてください。その際に「なぜそこに線を引くのか」を説明するので、その説明もメモしましょう。

重要　**本文に線引きをする。説明や図はメモ欄に書く。**

目次

論理的文章
第１講　評論対策　その１……p1
第２講　評論対策　その２……p19
文学的文章
第３講　小説対策　その１……p35
第４講　小説対策　その２……p51
実用的文章
第５講　実用文対策　その１……p67
第６講　実用文対策　その２……p79
巻末付録
読解法一覧……p101
傍線部内容説明問題解法……p122
傍線部理由説明問題解法……p125
傍線部心情把握問題解法……p133

第1講　評論対策　その1

第1問

次の文章は、高岡文章（たかおかふみあき）「観光は『見る』ことである／ない――『観光のまなざし』をめぐって」の一部で、ジョン・アーリをはじめとする研究者の見解をふまえて書かれたものである。これを読んで、後の問い（**問1～6**）に答えよ。なお、設問の都合で表記を一部改めている。（配点　45）

アーリは「文化的なメガネ」という卓抜な表現をもちいて、見ることの社会性を明るみにだしている。まなざしの枠組は規範や様式といった社会／文化的な制度によって規定されているのであって、決して個人が自由に個性的に対象をまなざしている訳ではない。鈴木涼太郎によれば、ベトナムを訪れる日本人が観光みやげとして好むのは「ベトナムの伝統文化」を表象する手作りザッ(ア)カであるのに対し、欧米からの観光客は「東洋文化」を表象する美術品としての大型の壺を求めるという。ここでは観光者が所属する社会によって、訪問地へのまなざしが異なっているのだ。

山口誠はグアムを訪れる日本人観光客の多くが楽園やリゾートといったグアム的記号にあふれたタモン湾から一歩も出ず、その周囲にひろがる多様な現実への想像力から目を背けていると指摘する。人はフレームをとおしてものを見る。何かを「見る」ことは、他の何かを「見ない」ことでもある。まなざしには常に選別がともなっている。

まなざしの線引きをおこなっているのはゲストだけではない。橋本和也は観光者が期待

メモ欄

する（押しつける）イメージに適合的な役割を観光地住民が再演することは、観光という荒波から自らの生活文化を守るためのホスト側の「戦略」でもあるという。

「刹那的」[注1]であると同時に（であるがゆえに）対象に魅力を感じるという観光のまなざしの暴力性はとどまるところがない。一九世紀から二〇世紀にかけて世界各地でおこなわれた万国博覧会[注2]では、植民地住民の「展示」がおこなわれた。悪名高い「人間動物園」である。見る主体（多くは西洋の男性）と見られる客体（多くは非西洋の女性）のあいだには乗り越えがたい線が引かれていて、まなざしは境界線の恣意性を見えづらくし、その権力性を再生産する役割を果たす。

近代以前の刑罰は多くの場合、見せしめのためにおこなわれ、それは格好の「見世物」であった。現代でもダークツーリズム[注3]と名を変えて、おぞましいものへの欲望が観光（の一部）を支えている。それゆえ A 観光地住民の「戦略」は常に綱渡りである。アメリカの社会学者ディーン・マキャーネルが『ザ・ツーリスト』で指摘したように、観光者は「演出」に飽き足らずその「舞台裏」を見たがるのだから。ありのままを見せる生活観光は、出口の見えない隘路（あいろ）[注4]でもあるだろう。そこでは観光のまなざしが全域化していく。

B 観光において「見る」ことは問題含みであるだけでなく、とくに「する」こととの対比において、価値のないものとみなされてもきた。

見る主体と見られる客体という、乗り越えがたい（ようにみえた）関係性は、意外な形で反転する。観光者がまなざすのは、たいてい（自分以外の）人びとの生活実践やその痕跡である。偉大な芸術、壮大な遺跡、珍しい風習、初めて出会う食文化などなど。観光の場面において彼らは「見るだけ」のよそ者だ。ここでは見られる側、つまり生活「する」

メモ欄

側が主役であり、それを「見る」側は観客にすぎない。文化人類学や地域社会学、環境社会学による地域研究／観光研究は、生活者の視点にウエイトを置く。その土地に暮らし働く人びとこそが当事者なのであり、彼らの生活や文化を覗（のぞ）くために訪れて、そそくさと立ち去っていく観光者たちは招かれざる客として位置づけられてきた。

　観光のまなざしにおける消費主義や薄っぺらさを鋭く批判したのはブーアスティンだった。一九世紀のなかばに旅行が変容したと彼は述べる。かつての旅人（トラベラー）が没落したかわりに観光客（ツーリスト）が台頭した。それは、旅行が「自分のからだを動かすスポーツから、見るスポーツへと変化した」ことを意味していた。「する」から「見る」への転換。旅は能動的で命がけの行為から、購入するだけのお気楽な商品へと、「無意味」で「空虚」なものへと成りさがったと彼は考えたのだった。

　ブーアスティンの嘆きを時代錯誤と笑うことはたやすい。彼の観光論は、あたかも理想的で「ほんとうの」旅がどこかに存在するかのような幻想にさいなまれているというのが、後続の観光研究におけるお定まりの批判なのであるが、C<u>ことはそれほど単純でもない</u>。

　表層的な観光のありかたへの飽き足らなさや批判は、現実に観光の形を大きく変えてきた。従来の大衆観光が観光地社会への無理解や無関心といった特徴を帯びていたのに対して、二〇〇〇年以降、新しい観光／オルタナティヴ・ツーリズムが提唱され実践されてきたのだ。キーワードは「体験」「交流」「学習」である。地元住民の案内によって現地を歩きながら「ほんもの」の歴史や文化を学んだり、農村や漁村の民家に宿泊して「その土地ならでは」の生活を体験したりするような、活動的なプログラムが提供されている。「見

メモ欄

る」観光から「する」観光への転換は、個人旅行のみならず、こんにちでは修学旅行をはじめとする団体旅行においてすら主要なメニューとなりつつある。冒頭(注5)に述べた京都祇園(ぎおん)の着物観光は、このような動向の延長線上においてこそ、よりよく理解することができるだろう。

近年、観光現象だけでなく観光研究の視座までもが更新を迫られるようになった。研究対象としての観光が「見る」から「する」へと変化しただけではない。そもそも観光は、はたしてほんとうに「見る」ことだったのかという根本的な問いが突きつけられている。たとえばアルン・サルダンハはアーリのまなざし論を批判して、「観光者は、泳がないのか、山へ登らないのか、(イ)サンサクしないのか、スキーをしないのか」との疑問を(ウ)テイした。

観光研究は、アーリのまなざし論を乗り越えるべく理論的な発展を試みてきた。観光における身体性やふるまいを重視する視点を「パフォーマンス的転回」と呼ぶ。視覚のみならず嗅覚や聴覚、触覚、味覚など多様な感覚との連関において観光をとらえたり、観光者の身体性やしぐさ、パフォーマンスに分析の力点を傾けたりするような研究が積み重ねられてきた。アーリ自身もヨーナス・ラースンの助力をえて改訂した『観光のまなざし』第三版にパフォーマンスをめぐる章を設け、観光（研究）におけるパフォーマンス概念の重要性に注意を促すにいたっている。

観光はもはや「見る」ことだけで説明できるほど素朴な行為ではない。とはいえ、アーリとラースンは、視覚でどこまで説明できるかといえば「それには限界がある」と認めつつも、「視覚が観光体験の中心にある」と食い下がる。彼らにしたがえば「見る」か「す

メモ欄

る」かの二者択一は不毛なのであって、まなざしとパフォーマンスはD「ともに踊る」関係なのだ。観光のまなざし論はパフォーマンス的転回によってイッ(エ)ソウされたのではなく、それを取り込みつつ生き長らえる。

かつて、人類学者たちは調査地に観光客が訪れることを毛嫌いしてきた。「文明に毒されていない」「未踏の」伝統文化こそを欲望するまなざしは、下世話な観光客たちを巧妙に排除してきたのだ。「観光者を見ない技術」は私たちにも心当たりがあるだろう。海外で出会う日本人観光客をあえて見ないふりをしたり、「誰もない風景」をカメラにおさめるために観光客が通り過ぎるのを待ち続けたりといった経験をしたことはないだろうか。ここでは、アーヴィング・ゴフマンのいう「儀礼的無関心」が駆使されていて、互いが互いの観光を邪魔しないよう高度なコミュニケーションが交わされている。

他方、「観光者を見る技術」も巧みにもちいられている。アーリは、山の頂上や森の奥など、他の観光者がいないことがその場所の観光的価値を高めるような状況を「ロマン主義的まなざし」と呼び、それに対して、他の観光者も同じ場所に来ているという事実がその場所の観光的価値を高める状況を「集合的まなざし」と呼んだ。後者においては、他者の存在が愉快さ、祝祭的気分、活況を与える。

他者を排除するまなざしにしても、それを取り込むまなざしにしても、ここでは他者の身体性が問題となっている。吉見俊哉は『都市のドラマトゥルギー』のなかで、都市を歩く人の身体性にいち早く言及していた。一九七三年にパルコ(注6)が渋谷・公園通りに開店した際のキャッチコピーは「すれ違う人が美しい」であった。パルコは渋谷という都市を舞台、そこを歩く人びとを主役と見立てて都市空間を演出した。渋谷を訪れる若者たちがま

メモ欄

なざしたのは、資本が演出する記号のみならず、それらと E「ともに踊る」身体なのであった。吉見によれば、都市は「「見ること」と「見られること」を媒介する役割」を果たしていた。

ゲストは他のゲストからだけでなくホストからも「見られ」ている。ダリヤ・マオズは観光者が地元住民をまなざすとともに地元住民も観光者をまなざすのだと述べて、それを「相互のまなざし」と名づけた。こんにち、京都でバルセロナでヴェネツィアで、オーバーツーリズム(注7)の張本人として観光者は冷たい視線を浴びせられている。新型コロナウイルス感染症の流行は、観光者をこの世界で最も(オ)イまわしい存在とみなした。

F 観光における「見る／見られる」を考えるうえで、サファリパークは示唆的である。動物のリアルな生態に肉迫するべく、人びとは車に乗り込んで特等席を確保する。動物たちは車に群がり、物欲しげに人間をまなざす。人間はふたたび動物園の檻（おり）に閉じ込められて、まなざしの対象となる。かつての万国博覧会とは違って、彼らを見ているのはもはや人間ではない。

（注）
1 「刹那的」であると同時に（であるがゆえに）対象に魅力を感じるという観光のまなざし――本文より前のところで、歴史学者のヴォルフガング・シヴェルブシュが、鉄道が人間にもたらした知覚のあり方について「対象をその刹那的性格のゆえに、逆に魅力あるものと見なす知覚」と指摘したことが紹介されており、こうした知覚のあり方が観光のまなざしにも見られることが述べられている。

2 万国博覧会――複数の国々が一つの場所に集い、自国の技術や生産品を展示する催し。

3 ダークツーリズム――戦跡など、人びとを襲った不幸や悲劇にまつわる場所を観光地として訪れること。

メモ欄

４　隘路――　狭くて通りにくい通路。

５　冒頭に述べた京都祇園の着物観光――　本文を含む論考全体の冒頭で、観光客がレンタル着物に身を包み、祇園を歩く様子が紹介されている。

６　パルコ――　東京都渋谷区にある複合商業ビル。若者文化を発信する拠点とされた。

７　オーバーツーリズム――　観光客の著しい増加によって、住民の生活や自然環境が脅かされること。

メモ欄

問１　傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は［１］～［５］。

(ア)　ザッカ　［１］
① 米のカカクが変動する
② 機械をカドウさせる
③ ガイカを獲得する
④ 他人に責任をテンカする

(イ)　サンサク　［２］
① 葡萄（ぶどう）をアッサクする
② サクボウをめぐらす
③ 文章をテンサクする
④ 解決の道をモサクする

(ウ)　テイした　［３］
① オンテイを合わせる
② 記念品をゾウテイする
③ セケンテイが悪い
④ ゼンテイ条件を確認する

メモ欄

(エ) イッソウ 4

① 店内のカイソウ工事を行う
② ソウゴンな建物
③ 事件のソウサに協力する
④ 床をソウジする

(オ) イまわしい 5

① 古くからのキンキを犯す
② キキ迫る演技
③ キグの念を抱く
④ 大会をキケンする

メモ欄

問２　傍線部Ａ「観光地住民の『戦略』は常に綱渡りである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［６］。

① 観光者の持つイメージを受け入れることで自らの文化を維持しようとする観光地住民の「戦略」は、観光者のまなざしが観光者の所属する社会の制度に規定されているために、他者の文化の受容を強いられかねないということ。

② 何をどこまで見たり見なかったりするかという観光者の選別に対応していく観光地住民の「戦略」は、観光者の恣意によって観光の対象が変わるために、そのまなざしにもてあそばれる事態を招きかねないということ。

③ ありのままの現実を見たがる観光者に寄り添おうとする観光地住民の「戦略」は、おぞましい部分を好んで観光の対象とする観光者のまなざしのために、観光地住民が自らの手でその生活をゆがめてしまいかねないということ。

④ 自らの生活文化を守るために観光者の期待に応えて演技をする観光地住民の「戦略」は、演出の裏側をも見ようとする観光者の欲望のために、観光者が期待するものを際限なく生活のなかで見せていくことになりかねないということ。

メモ欄

問３　傍線部Ｂ「観光において『見る』ことは問題含みであるだけでなく、とくに『する』こととの対比において、価値のないものとみなされてもきた。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は［７］。

① 観光研究が土地に暮らす人々の生活を覗くためだけに観光地を訪れる観光者を批判し、また、ブーアスティンが旅に命をかけてきた旅人に意味を見出(みいだ)したことによって、「見る」主体の位置づけに変化が生じたということ。

② 観光で重視すべきは観光地住民の生活を体験することであり、旅行は本来「する」ものであるということが、観光研究やブーアスティンによって指摘されたことで、観光における「見る」ことの役割が後退したということ。

③ その土地に暮らす当事者の視点を重視した観光研究によって観光者はよそ者として位置づけられ、能動的な旅を充実したものと捉えるブーアスティンによって「見る」だけの観光が軽薄なものと考えられたということ。

④ 自らの生活や文化に価値を認める生活者の視点を重視する観光研究と、「する」から「見る」への旅行の変容を嘆くブーアスティンの見解が重なることで、「見る」側の観光者が無意味な存在に貶(おとし)められたということ。

メモ欄

問４　傍線部Ｃ「ことはそれほど単純でもない」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［８］。

①　表層的な観光への不満や批判が、その土地の生活を体験するプログラムを人気の観光商品に押し上げることにつながり、さらにこうした変化をふまえることで、多様な感覚との連関において観光を捉える観光研究の方法が構想されることになったから。

②　表層的な観光への不満や批判が、観光地の生活を覗くだけの観光から観光地社会の実際を体験しようとする観光への転換を促し、さらにこうした変化と並行して、観光者のふるまいに注意を向けるようなかたちで観光研究の着眼点が改められていったから。

③　表層的な観光への不満や批判が、かつての旅人による能動的な旅を再現する観光を要求することにつながり、さらにこうした変化に呼応して、観光は「見る」ことだけで説明できる行為ではないという新たな認識を観光研究にもたらすことになったから。

④　表層的な観光への不満や批判が、観光地社会に対する無理解さを反省した新しい観光を実践することにつながり、さらにこうした変化を受けて、観光地に対して観光者が正しくまなざしを向けるような方法を探求する観光研究の創出につながったから。

メモ欄

問5　傍線部D「『ともに踊る』」はアーリとラースンの『観光のまなざし』第三版からの引用表現であり、筆者は傍線部E「『ともに踊る』」でその表現を再度用いている。これらの表現の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［９］。

①　傍線部Dでは観光研究においてまなざしとパフォーマンスが重要な視点であることを表し、傍線部Eでは都市の研究において商業施設と若者の身体が都市という舞台を考えるうえでともに重要な対象であることを表している。このように「ともに踊る」という表現は、複数の視点を組み合わせることにより新しい研究が可能になることを示している。

②　傍線部Dでは観光におけるまなざしが観光者の身体と関わって成り立っていることを表し、傍線部Eでは都市を彩るイメージと人々の身体がともに都市という舞台を形作っていることを表している。このように「ともに踊る」という表現は、「見る」人が見るだけではなく、行為する存在でありかつ他者のまなざしの対象でもあることを示している。

③　傍線部Dでは他の観光者とともにあることが観光地の価値を高めるという観光のあり方を表し、傍線部Eでは都市を歩く人とそれにまなざしを向ける若者の存在とが都市の魅力を高めている様子を表している。このように「ともに踊る」という表現は、他者の身体とそれを「見る」人がともに観光地や都市の価値を高めていることを示している。

メモ欄

④　傍線部Ｄでは「見る」人と「する」人とが互いに高度なやり取りを行っている観光体験のありようを表し、傍線部Ｅでは「見る」人と「見られる」人とがともに行き交う都市空間のありようを表している。このように「ともに踊る」という表現は、ふるまいとまなざしとの区別や主役と観客との区別が分かちがたいものであることを示している。

メモ欄

問6　傍線部F「観光における『見る／見られる』を考えるうえで、サファリパークは示唆的である。」とあるが、文章中に示された「見る／見られる」の事例との関係において、サファリパークはどのような意味で「示唆的」であると考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 10 。

① グアムなどのリゾートでは、ゲスト側の「文化的なメガネ」を通したまなざしがホスト側に押しつけられる。一方でサファリパークでは、見る主体である人間の欲望と、物欲しげに人間を眺める動物の欲望との違いが現れる。このようにサファリパークは、ゲスト側のまなざしとホスト側のまなざしとの非対称性を考えさせる点で示唆的である。

② 植民地住民の「展示」では、見る主体と見られる客体が恣意的に固定される。一方でサファリパークでは、見る主体である人間が動物の暮らす場に入っていくことで、動物の欲望のまなざしにさらされる客体にもなる。このようにサファリパークは、見られる側に強いられる一方的なまなざしが、見る側にも向けられる場である点で示唆的である。

③ 観光研究では、見られる側の観光地住民の生活が重視され、見る側の観光者はそそくさと立ち去るよそ者とみなされる。同様にサファリパークにおいても、主役はそこに暮らす動物であり、人間は観察者として通り過ぎるだけの存在である。このようにサファリパークは、見る側の観光者が「招かれざる客」であることを想起させる点で示唆的である。

メモ欄

④ 観光の現場では、観光者は他の観光者を見る存在であると同時に他の観光者から見られる存在でもある。同様にサファリパークでも、動物を見る他の客の邪魔をしないよう注意を払ったり、他の客と一緒に動物を観察しようとしたりする。このようにサファリパークは、観光者相互のコミュニケーションのあり方に注意を促す点で示唆的である。

「大学入学共通テスト」２０２５年度本試験より

メモ欄

■2025年度 本試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第１問（45）	1	1	3	2
		2	2	2
		3	2	2
		4	4	2
		5	1	2
	2	6	4	7
	3	7	3	7
	4	8	2	7
	5	9	2	7
	6	10	2	7